

驛路

〔類聚名物考地理六〕三又路口 おひわけ 追分 三又口 みつまた

今道の兩股に分りたる所を俗に追分といふ、是即三又口にして、簪の股の形に似たればいふ也、この事歌によみ、物語に書るをいまだ見ず、さきに紀行あるせし時に、道は琴柱の如くわかれたりと書し、事有き、簪の如くともいふべし、五色石第二に、三又路口と見えしは、三股の追分也、

〔書言字考節用集一〕驛路ハムヤチ

〔倭訓栞中編二十六〕むまやち 驛路の義なり、むまつぎともいふ、延喜式に驛子あり、馬子の如し、

〔扶桑略記神功二〕五十年二月、始造路驛、

〔萬葉集十一〕寄物陳思古今相聞往來歌

驛路爾、引舟渡、直乘爾、妹情爾、乘來鴨、

〔類聚三代格七〕乾政官符

應畿内七道諸國驛路兩邊遍種菓樹事

右東大寺普照法師奏狀、備道路百姓來去不絕、樹在其傍、足息疲乏、夏則就蔭避熱、飢則摘子噉之、伏願城外道路兩邊、栽種菓子樹木者、奉勅依奏、

天平寶字三年六月廿二日

〔續日本紀二十七〕天平神護二年五月丁丑、太政官奏曰、備前國守從五位上石川朝臣名足等解僂、藤

野郡者、地是薄瘠、人尤貧寒、差科公役、觸途忿劇、承山陽之驛路、使命不絕、帶西海之達道、迎送相尋、馬

疲人苦、交不存濟、加以頻遭旱疫、戶纔三鄉、人少役繁、何能支辨、伏乞割邑久郡香登鄉、赤坂郡珂磨、佐

伯二郷、上道郡物理、肩背涉石三郷、隸藤野郡、中奏可

〔日本紀略桓武〕延曆十四年七月辛卯、遣在兵衛佐橋入居、檢近江若狹兩國驛路

〔吾妻鏡十〕文治六年元久十月五日丙戌、於關下邊、陸奥目代解狀到來、仍彼國地頭所務間有被定